

報 告

2017年度 日本医学図書館協会近畿地区会
日本薬学図書館協議会近畿・中四国・九州地区協議会
近畿病院図書室協議会3図協共催シンポジウム 参加報告

藤原 純子

日 時：2017年10月24日(火)13:00~17:00

場 所：大阪大学生命科学図書館4階ラーニン
グ・コモンズ、AVホール

プログラム：

「教え方」を学ぶ：医学系図書館におけるインス
トラクショナルデザイン活用

1. 講演・ワークショップ「教え方」を学ぶ：

インストラクショナルデザインについて

大阪大学全学教育推進機構 准教授

堀 一成 氏

2. 事例報告

滋賀医科大学附属図書館

情報サービス係 係長

藤村 三枝 氏

3. 全体討議 質疑応答

参加者数：37名（うち病図協6名）

「教え方」を学ぶという魅力的なテーマに誘われて、シンポジウムに参加しました。参加者は事前に実行委員会によって決められた班のテーブルにつきました。ラーニング・コモンズの可動式のテーブルを大学図書館、薬学図書館、病院図書館など館種の異なる6人が囲みます。堀先生の進行のもと、各グループで「なにかを『教える』際に困ったこと・悩んだこと・失敗したことはありますか？」というテーマについて、それぞれの経験を共有します。私の所属したグ

ループでは「受講者の基礎知識のばらつきから全員にうまく伝えることが難しかった」「質問内容を把握するのに時間がかかる」「学生の居眠り」といった悩みがあげられました。続いて「可能であれば、その対処法・どう解決したか」を自分で考えた上で、共有します。「受講者のレベル分けを行う」「問診票のように短い質問やチェックリストを使う」「短時間で伝える（スモールステップ）」などがあげられました。これらを各グループの代表がホワイトボードにまとめ発表します。各グループとも悩みは同じ、特に大学での学生の居眠りは共通する悩みのようなものでした。

ワークショップをうけて、堀先生の講演が始まります。ハンドアウトは配布されず、最後に配布されます。これも今回のインストラクショナルデザインのテクニックの一つであり、先のグループでのワークショップも受講者の意欲を高めるテクニックの一つです。講義では、大学に求められる学びの変化、図書館に求められる機能、役割が紹介されました。これまでの講義形式での学びではなく、相互協調学習が求められています。2013年の第2期教育振興基本計画（中教審）ではティーチング・アシスタント等の教育サポートスタッフの整備や、図書館の機能強化が明記されました。図書館にもラーニング・コモンズなどの学びの場の整備、レファレンスサービスや学生支援を大学図書館が主体となっていくことが必要とされています。図書館員はこれまでカウンターでの対面サービスや個

別教育、せいぜい利用オリエンテーションができればよかったものが、さまざまな講習会を開催したり、教える立場になりそれぞれに悩んでいる……。そこで本題のインストラクショナルデザイン「教えることの科学と技術」が教えることのプロではない私たちの力になってくれます。先にあげたグループ学習、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）、ADDIE モデルなどインストラクショナルデザイン（ID）の手法の概要を学びました。IDについてはわかりやすい書籍がたくさん出ているので、ぜひご覧ください。今後、高校生や小・中学生の学びもアクティブラーニングが重視され、私たちはアクティブラーニングを経験してきた人達と仕事をすることになります。病院図書館のオリエンテーションや検索講習、研修なども教える人の変化に意識を向けていく必要があること、教え方を学ぶことの大切さなど多くの学びがある講義でした。

休憩中には、生命科学図書館を見学することができました。いつも文献複写で私たちを支えてくれる生命科学図書館の蔵書にため息の漏れるひと時でした。また、参加者の皆さんと阪大オリジナルグッズの話題でも盛り上がりました。

休憩を挟んで、藤村氏より事例報告がありました。滋賀医大では講義・教員と連携して図書館が文献検索、文献入手の講義を受け持っています。変更前は講義中心で実習を交えながら行っていた検索講義を、講義とグループワークに見直したことで、学生が積極的に取り組み改善されたことが紹介されました。一度の見直しではなく、学生のアンケートを参考に何度も内容や方法を見直されてブラッシュアップされている点も感心しました。講義スライドや配布資料に実際に講義で使用されたマニュアルやグループワーク時に学生が使用する館内 map、課題用紙などもあり、参考になりました。堀先生の講義で学んだ ID の ADDIE モデルが実際に使われていたり、いまひとつ手応えの感じられない講義に対して課題意識を持って ID を使って改善されている事例はとても素晴らしいと感じました。

全体を通して、どれも学びの多いプログラムでした。グループワークで各大学の方から学ぶことも多く、貴重な時間でした。開催にあたってご尽力くださった実行委員の皆さまと講師の先生方、会場の大阪大学附属生命科学図書館の皆さまに感謝いたします。